

現代アメリカ小説を取り巻く人間と世界：脳科学とインターネットの狭間で語ることの困難さと大切さ、Thomas Pynchon の Bleeding Edge を中心として

著者名(日)	檜崎 寛
雑誌名	大妻比較文化：大妻女子大学比較文化学部紀要
巻	15
ページ	29-42
発行年	2014
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00005921/



現代アメリカ小説を取り巻く人間と世界 —— 脳科学とインターネットの狭間で語ることの困難さと大切さ、 Thomas Pynchon の *Bleeding Edge* を中心として

梶 崎 寛

前置き

小説家が小説を書くための前提としての人間と世界が激変している。そうした変化の中で、自らの状況を踏まえつつ、限りある視野から、人間と世界に関して文学的表現を試みることの困難さと大切さを、Thomas Pynchon の *Bleeding Edge* (2013) を通して示したい。政治経済との関連は補足するに止める。当然、人間の定義や法人の自由や権利にも関わるが、人間の身体性や宇宙の構造、惑星思考などには、触れない。論点にかかわる脳科学とインターネットの影響と現代アメリカ文学との関係に焦点をあてる。

人間と世界の激変を例示しておく。基本となる人間観がダーウィン、フロイトなどの影響に加え、近年は人間が生物として、DNA や RNA などを媒体として引き継いできた特殊性や限界が確認されつつある。さらに、それを分析し、映像化する機器がコンピュータを活用して発展している。特に本論に関係が深いのは、内的には、人間の自我をになうと信じられてきた脳と認知に関する研究だ。外的には、作家をとりまく環境として、インターネットを中心とする情報の氾濫と、その背景にあるコンピュータ技術の発展とがある。ともに、現代世界を変革し、人間観に影響し、小説を書くことの意味を変化させている。

その視点をさらに展開するなら、不確定な言葉として支配的になってしまった民主主義や資本主義が、個々の人間にとっても、現実世界においても、その力を失いつつあると思われる。

一個人が論じ切ることができるはずもない問題を焦点とするきっかけが2つあった。1つは、先行研究として紹介する3冊の、門外漢とも言える人々の著作であった。自分の狭い意味での専門から踏み出して、芸術家個人の表現としての作品を解釈しなおす示唆的な先行研究として、2章で紹介し、踏まえてゆく。

2つ目のきっかけは、間接的に触れる Edward Said の *On Late Style: Music and Literature Against the Grain* (2006) と、それを踏まえた大江健三郎の著作活動である。現時点で、言いたいことを言っておかないと、遅すぎる (too late) かもしれないと感じた次第である。

21世紀にはいっても、民主主義の矛盾は解決されていない。具体例を挙げれば、国連では第二次世界大戦の戦勝国が拒否権を持つ反面、総会ではどんな小さな国でも一票の権利を有する。日本においては、一票の格差と若者の投票率の低下などが具体例となる。民主

主義の理想の実現が、国を越えて平等化と情報化が進む現代では、困難になりつつある。日本の国会では、形式民主主義的手続きを踏まえて、単純多数決により、憲法までが変えられる可能性があるし、アメリカでも、フィリバスターを防止するために、上院で大統領の要職への指名権の了承が、上院で単純多数決になった。

現代の人間と世界に関する情報は、一個人には把握しきれない。作者はその情報の渦中にある。小説を書くことの困難と大切さを、共感とともに確認するのが本論の目的である。文化的背景の比較対象の出発点を1900年ごろのウィーンの芸術として、ほか2冊の先行研究を利用して、現代まで展望を広げる。3章でアメリカの20世紀小説を、論点との関連で概観する。4章で、現代小説の具体例として、Thomas Pynchon の新作、*Bleeding Edge* を解釈し、評価する。

Pynchon がはやらせたパラノイア風に、近年の課題を補足的に点描する。科学技術という点では、インターネットの普及とともに、情報量が個人には把握不可能になっている。同時に、その情報を媒介する通信の秘密や、その秘密を守るはずの暗号化が、国家の科学技術の粋を集めて破られている。アメリカ最高裁では人間の遺伝子の特許権は否定されたが、警察による遺伝子の収集統合は違法ではないと裁定された。クローンの時には問題になった、人間の定義が、iPS細胞で脳が一部作れるようになった時には、喜ばしい科学技術の進歩として報道された。無人機 (drone) による殺人は頻繁に報道されるが、地上戦でも殺人口ロボットが実用化されつつある。その規制は成立していないので、今後もそうした兵器を先進国が作り、資金のある国が実戦で使用し、民間人の命が失われることになるだろう。

インターネットの無法化という点では、オフ・ショアの治外法権の扱いが課題である。全世界の変化を瞬時に商取引の対象にするのが、現在の巨大資金、銀行などの動向である。1000分の1秒で売買するコンピュータ化された世界の巨大資金の動きやビット・コインに、個人も政府も対応できない状況のまま、マーケットは擬人化され、法人の権利がFTAなどで国を越えて保障されつつある。現代の資本主義は変化し、その影響で格差が広がっている。Pynchon も、パラノイア風にではあるが、マネー・ロンダリングやオフ・ショア取引を含めて、小説の背景として不気味な動きを描いている。

温暖化に関しても、経済大国の会議で実効性を疑わせるような対応しかできなかった。経済回復といっても、地球の資源と、養わなくてはならない人口の数がつりあわない。エコロジカル・フット・プリントという指標は、全地球で1.5、日本4、アメリカ7程度と推計されている。穀物生産量は、すべてを人間の食料にすれば、FAOの発表で8億とされる飢餓人口はなくなる計算であるのにも関わらずである。

David Foster Wallace が情報の津波に悩みつつ、自殺し、John Barth も老後を悲観して排ガス自殺を描き、*Final Fridays* (2012) で筆を折るような文学状況の中で、小説を書くことの困難さと大切さを中心に、小説を読み、批評する立場から、展望できる範囲で、

*Bleeding Edge*を読み解いて、その位置を評価する。

2章 芸術と科学——作者の想像力を支える脳科学とインターネット

1節 現代脳科学者の1900年前後のウィーンの芸術界の再解釈

一番示唆を受けた先行研究は、脳の記憶の研究で2000年にノーベル賞を受賞した研究者、Eric R. Kandel の芸術史である。Kandel は、ウィーンに生まれ、フロイトの住んでいた通りの近くに育った。彼は美術史研究者 Ernst Gombrich (1909-2001) の指導を受け、1960年代に Oscar Kokoschka の1922年の作品を買い求めたような愛好者 (512) である。この本はそうした経歴を持つ脳科学者が、1900年から現代までの芸術と脳科学を関係づけた意欲作である。

その Kandel が重視するのが、ウィーンを中心とする芸術家と科学者との人間的交流である。その時代は、ダーウィンの研究によって、人間観が変化しつつあった時代だった。科学技術としては、内面を透視する技術としてのレントゲンが発見され、脳科学者であったフロイトが臨床医として開業し、性欲を取り上げ、そうした本能的な衝動が普遍的であるとした。それは、多少後知恵で総括するならば、人間の過去からの遺伝的影響を認め、個人の意識が単純な統一体ではなく、深層に支配されることを意味した。さらに、性欲を普遍的なものともみなすことにより、正常と異常のカテゴリーを崩したことになる。

Kandel は、脳の認知に関しては、自らの専門的知見を生かし、Gombrich が人間の芸術的知覚を解釈する方法として対比した "making and matching" のうち、ゲシュタルト心理学的な "matching" を重視している。その証拠として、Kandel は Gombrich をゲシュタルト心理学と認知心理学を美術史に応用した先駆者の一人であると評価している。(196) 現代の脳科学が芸術の再解釈に示唆的である理由である。

Kandel は、この本の後半で、専門家でない読者のために、脳科学の最新の知見を紹介している。人間の美的な意識や認知について、特に、表現主義を中心に、脳科学者として説明をしている。第2部、"Cognitive Psychology of Visual Perception and Emotional Resopnse to Art" では、後に触れる Richard Powers の小説に取り込まれている視覚的認知機能だけでも、30ものリレー回路が視神経から脳の各部位に連携していることを解説している。加えて、対象をゲシュタルト的に "what" とか "where" といったカテゴリーに分解して、脳が対象を認知していると論じている。また、最終のまとめにあたる第5部の "An Evolving Dialogue Between Visual Art and Science" では、現代の絵画と脳科学との密接な関係を指摘し、芸術と科学を再統合させる試みとして本書をまとめている。脳の積極的関与で、人間は外界を認知するという、21世紀に入り、科学的に証明されつつある知見から、芸術作品とその制作者と時代背景を見直しているのだ。

表現主義といわれる美術の試みや、意識の流れという文学のスタイルが、いずれも、理

性的人間の意識の背後にあるものを表現しようとしたという点では共通しているし、それはダーウィンやフロイトなどによる科学の応用であると読み取ることができる。ダーウィニズムと脳の研究が進み、芸術の発信と受容の方法がインターネットを介して激変した一世紀を顧みる先行研究とするゆえんである。

2節 バーチャル・リアリティーを開拓したミュージシャンが批判するインターネット

Jaron Lanier も芸術を愛し、*You Are Not a Gadget* (2010) でインターネットの現状を憂いている。彼は、特定の時代的、地理的背景に生きる個人の表現としての芸術を持続可能にしてゆくためには、現在のインターネットの基本システムに欠陥があると論じている。要約して解釈するならば、インターネットの匿名性、断片性がよくないと批判しているのだ。音楽の無制限なサンプリングやコピーは音楽家の独自性も経済的利益をも犯しているというのだ。ネットを使って宣伝し、利益を上げていると主張する人々もいるが、彼が実際に調べてみると、そうした少数者も、ネットだけからの利益ではなりたないことを示している。

コンピュータやOS、ブラウザの進化についても、Lanier の心配は現実になりつつある。インターネット上の無数の似たような、無料で利用できる作品や情報のオリジナリティーや信頼性に関して、根本的な価値判断ができないまま変更が進んでいるのだ。芸術作品のコピーだけでなく、技術的な情報などの流出による損害は巨額にのぼり、個人の知的所有権やプライバシーを脅かしている。

さらに、Lanier は、コンピュータが人間の知能を超えて、自動的に進化する "singularity" と呼ばれる事態も想定している。人間の能力とコンピュータの機能の逆転の可能性と時期は無視できない。そうなれば、個人の判断だけでなく、人間の文化にも影響があるであろう。Wallace は人間が自らの意思でやめることができないほど楽しいプログラムを作品中で想定した。現在のコンピュータやスマホの維持管理に費やされる時間と、インターネット上の通信量の影響は想像を超えている。人間がコンピュータを作り、プログラムを書いて、音楽やバーチャル・リアリティーを楽しんでいた時代から、人間がインターネットに付属する機械 (gadget) となることに Lanier は警鐘を鳴らしているのだ。

現在、コンピュータが人間を誘導しつつある2つの事例を補足しておく。1番身近なのが Google などの検索エンジンの "self complete" という機能で、自分が検索したいキーワードの最初の一部を入力すると、後の候補を提示してくれるプログラムである。便利でもあり同時に、プログラムが検索者を誘導してしまうことにもなりかねない。2つ目の誘導は、無料のサービスを支えている広告による消費の誘導である。パソコンやスマホのサービスや、ゲームを含むプログラムを利用するときに、利用契約に同意しなければ利用ができないが、その同意に個人のプライバシー、アドレス帳から位置情報までを提供することが含まれていることがある。そうした個人情報を利用して、会社は個人を標的に広告を打つ

てくるのだ。そうして集められた情報の集合、ビッグ・データを使い、人間と世界を統計的に解明しようとする、危惧される実験が進行中である。

Lanier はコンピュータ技術者として、コンピュータの将来を危惧している。参考文献にあげた Dennet の脳科学の紹介を踏まえて、1つのニューロンの機能をコンピュータで作り上げたとしても、その1つのニューロンが7000ものシナプスを経由して、他のニューロンとつながっていて (70)、その集合体が脳の部位を構成していることまで考えると、当面 "singularity" は実現しそうにもない。さらに、トリビアに近くなるが、ニューロンにデジタルな信号を送る神経伝達物質の細胞内の生成の仕組みがやっと解明されはじめた段階である。そうした現段階でも、コンピュータとそのシステムは人間と世界を変えつつあるのだ。

文学に限ってみても、コンピュータの処理速度と膨大な記憶量に加えて、インターネットの自由度は脅威ともなりうる。1972年に開始された著作権が切れた書物を特定のソフトに依存しない方法で無料公開する Gutenberg Project や、アメリカの連邦地裁が2013年に認めた Google Books は読書の概念を変えてきている。電子図書として、Amazon が支配的になっていくのは、コンテンツが安く、即時に入手できるだけでなく、出版までの時間の短縮と、作者の利益配分が紙媒体では不可能なほど高いことにもよる。現時点でも、ペーパーバックが少なくなりつつあるだけでなく、Stephen King のような著名な作家も即時性と高い著作権使用料をもとめて Amazon の電子書籍からのみ発表することがある。Amazon が新聞を含めたメディアを支配して、グーテンベルグ以来の印刷文化に変化がおきつつあるのだ。

すべての作品を網羅した図書閲覧システムができたとしても、選択し、読みきることができないという意味で、Lanier が心配する芸術の無個性化、無意味化も近未来の問題となる。Lanier も、現代の "Bigger Borges" という表現で、図書館、音楽館の可能性とその文化的影響を論じている。Pynchon も *Against the Day* (2006) で、"a composite of all possible museums" という統合博物館を想定している。芸術や情報の無料化や共有は、芸術家にとっても、一般の人間にとっても、想定しにくい危険をとまなうのだ。

3節 正常の範囲と精神医学のせめぎあい、DSM-5 を中心に

文学は、その発生から、新奇なものを伝える役割をもっていたが、そこで表現される人間と世界の関係も、現代科学の進展と関係する。Allen Frances は精神科の臨床医として、人間の正常の範囲を幅広くみとめるべきであると主張している。彼は、ダーウィニズムを前提として、現在生き残っている人間の差異、特に脳の多様性は、人類の生存に有利に働いたはずだと考えている。そのうえで、精神医学の診断のマニュアルとしてのDSM-5の改定に参加した。その経緯を踏まえて、必要な範囲での精神医療を守るためにも、診断の拡大解釈を危惧しているのだ。人間の脳や、心身の多様性を維持しなければ、変化する地球環境で生き残るのは、多様性を保持した昆虫であろうと警告している。(241) 本論とのつ

なぎとして繰り返すが、Pynchon は、脳科学や向精神薬の知見を踏まえて、人間と世界を描いているのだ。

Frances は妻を介護するために、早期退職した医師であるが、現職の時から物忘れはひどかった。秘書室から自室にゆくわずかな距離の間に書類を紛失したり、勤務病院で、自室にもどれず、迷子になることもあったと書いている。携帯端末に夢中になり、通行人にぶつかったり、木の根につまずいたりすることもあった。そうした自らの物忘れを、痴呆とか、注意欠陥と診断して、薬物を投与することに彼は反対しているのだ。専門医による適切な治療は必要不可欠であるとしたうえで、メディアの影響による向精神薬の過剰投与は医学的にも危険であると指摘している。そうした事態は *Bleeding Edge* の冒頭部分で、DSM の未来を想定して取り入れられているので、その先行研究として踏まえておく。

アメリカの精神科の診断マニュアルとして、影響を強めているのが DSM-5 である。それが、精神医学の明証性と標準化を目指す点では評価できる。Frances は、その背景として、若手の研究者の新たな病名やカテゴリーにお墨付きを得ようとする業績の競争に加え、日本でも問題となった、製薬会社の研究者に対する働きかけから、実験に資金提供して関与する実態に注意を喚起し、その結果としての薬物の過剰投与の副作用について警告している。

以上3冊の芸術の根本問題に関わる学際的な研究書を紹介して、広範囲の視点や知識が、現代の作者が人間と世界を描くためには無視できない状況を確認した。作者も従来重要視されてきた、想像力といわれる能力だけでは人間や世界を物語ることが困難となっている。学際的な先行研究を踏まえて、4章で *Bleeding Edge* を現代作家の努力の成果として検討し、評価する。

3章 アメリカ20世紀の小説の人間と世界

アメリカの小説作者たちも、第二次世界大戦後は特に、民主主義と資本主義の影響下で、文学の役割について自問してきた。本論との関係では、Norman Mailer の "The White Negro: Superficial Reflections on the Hipster" (1957) が第二次世界大戦後の覇権国アメリカの作者の葛藤をよく示している。彼は、このエッセイの中で、ナチスの強制収容所における殺戮と原爆について、それが見るものを精神障害 (psychotic) にすると書いている。さらに、戦争の惨禍が、アメリカを含む、民主主義国家の行為であり、それぞれの国の投票権をもつ国民の間接的な結果責任を伴うものだと指摘し、第二次世界大戦が映し出す人間性について悲観的な考えを示している。

Mailer はマッカーシズムを経験して、発言すべき知識人が神経衰弱 (failure of nerve) に陥って、その影響でアメリカの作者は個人のミクロコスモスを描くことに逃避していると批判している。現時点から読みなおすと、そのタイトルからしてヒッピー的な反体制の風潮に乗っている印象はぬぐえない。加えて、黒人が、白人に対して、いかにも能天気な人

種であるかのような表現となってしまうのは、言葉の変化を含む歴史の皮肉だろう。なお、Philip Roth も "Writing American Fiction" (1961) のなかで、メディアの行き過ぎを嘆きつつ、同様の指摘をしている。以下、20世紀後半、ポストモダニズムと大括弧で呼ばれているアメリカ文学の作者の中から、本論と関連深い3つの作品を中心に触れて、2章と4章とのつなぎとする。

先にも言及した Barth は、*Lost in the Funhouse: Fiction for Print, Tape, Live Voice* (1968) という作品集で、人間の言語の埋め込み (embedding) を利用し、無限の長さの小品を書いている。この小品は、読者が1ページを切り抜いて、メビウスの輪としてつなぎ合わせて読むように作られている。その指示に従えば、無限の長さの一文が続くことになる。これが、作品集の冒頭におかれた "Frame-Tale" という作品である。その内容は "ONCE UPON A TIME THERE" とその裏面に "WAS A STORY THAT BEGUN" というだけであるが、作者の指示に従えば、無限の長さの作品となり、それが人間の脳の文法構造を応用していることになる。もっとも、そうした文法構造が言語習得期に選択されるので、日本語への翻訳、翻案は困難ではある。さらに、この作品が「枠物語」(frame-tale) として、この作品集のすべての作品の虚構性を示す枠組みとなっているのだ。これは、Barth が他の作品でもたびたび言及する、『千夜一夜物語』とその語り手、シェラザードの再利用にも通じる特色である。

この実験的な作品は、作者の意匠、もしくは仕掛けのほうが面白く、人間や世界を描く内容には乏しい。ただし、文学の伝統にのっとり、それを小説に組み込み、絶えず新しい作品を求め続けた現代文学の一例である。同時に、そうした理屈の過剰に反発してきたアメリカ文学の一例でもある。

人間の脳とコンピュータの関係で、Richard Powers の2つの小説を例にあげて、科学技術の知識が小説の作者にも読者にも必要となりつつあることを示しておく。1つめの小説は *Galatea 2.2* (1995) に設定される人工知能コンピュータ (AI) と人間との悲劇である。男性コンピュータ技術者が、いくつかの試作品を作り、"Galatea" という女性の名前をつけた AI のバージョン 2.2 に、古典文学を含むさまざまな情報を入力して学習させ、ついにコンピュータに人間のような意識を持たせることに成功する。しかし、そのコンピュータは、他に選択肢もなかったと考えられるが、当の技術者に恋をしてしまうのだ。

後に触れるアイドルと違い、自分の限界をも認識している Galatea は、自分が自由な身体を持たないことも、自分の愛が成就できないことも、自覚する能力を持っている。だからこそ、技術者に、自分の分も世界を見てねと言い残し、自らをシャットダウンし、自殺するのだ。この作品は、近未来に想定される、コンピュータが人間の知能を超える "singularity" の問題を提起すると同時に、メロドラマチックに人間の責任と決断を回避しているという点で、本論に関係する、示唆的な作品である。

Powers は、コンピュータ技術の未来像を小説化した後に、人間の脳の複雑さと、脳が担

う認識の危うさを *The Echo Maker* (2006) で取り扱っている。脳の部位の機能が発見され始めた時期、1923年に発見されたカプグラ症候群を中心に小説を組み立てているのだ。

この小説ではそうした知識を読者に媒介する脳科学者が設定されている。その脳科学者によれば、人間の顔の認知だけでも、32の脳の部位、モジュールが関与し、しかも各部位が絶えず相互に影響しあっている。その認知が関係する1つの部位でも、あるいは、影響しあう神経経路の1つでも壊れた場合には、認知は成立しない。カプグラ症候群では、顔は認知できても、感情的同一化が伴わないので、人間関係は成立しない。Pynchon も alexithymia に言及している。(25)

Kandel は、脳の部位やその機能としてのゲシュタルト心理学も経由しながら、人間の美意識に関して現段階での解説を試みているが、Powers も、Richard Dawkins や Daniel C. Dennett などの著作は読んでいたと想像できる。現代の作者たちが、人間の脳科学に関する新たな知見に関心を持ち、それを小説に組み込む必要性を感じていたことを、取り上げた2つの小説で例示したこととする。

最後に取り上げる William Gibson の *Idoru* (1996) はインターネットを前提として生きる14才の少女を視点的人物としている。SF作家として有名な作家の作品としては、そのタイトルから日本人として、不愉快な感じもする小説ではあるが、論点の補足として都合がよいので使用する。

不愉快なのは、タイトルで、日本語訳ではわからないが、日本人が r と l を聞き分けられず r で代用することを強調して、アイドルを "idoru" と表記しているのだ。異文化の表現なのか、風刺なのかは判然としない。論点としての人間の脳の機能から解釈するならば、日本人の言語学習の結果としての日本文化の反映ではある。

Pynchon につなげるために、インターネットと人間の環世界に視点を移して、少女の無批判なインターネットの受け入れに絞って紹介する。少女から見た母親の "now" の認識が、根本的に (radical)、理解不能なほど (mysterious) 違っていると少女は考えている。彼女の "now" はデジタルで、柔軟 (elastic) で、瞬時に情報を獲得できる幅をもっていると感じている。重要で、Lanier を踏まえれば危険なことに、彼女はそのグローバルなシステムを将来にわたって理解するなんて面倒なことをしなくていいと考えている。インターネットが少女の知識を支えていると同時に、理解不要かつ不可能なものになっているのだ。

本論とは直接関連しないので、手短かに紹介するに止めるが、この小説を幼稚で楽観的な作品であるとは片付けられない。Gibson はベトナム戦争の徴兵を回避するために、カナダに逃れた作家である。さらに、主人公として設定されている少女が、無批判に受け入れているインターネットやバーチャル世界の問題が、作者の認識と同じであるはずはないからである。

Galatea 2.2 を逆にしたようなあらすじも、悪乗りや風刺として片付けることはできない。コンピュータが作り出すバーチャルな女性に、生身の男が恋をし、結婚するという

筋書きも、程度の差こそあれ、現在のさまざまなキャラの流行や、フェイスブックを含む交流サイトと関連する。現代の人間と世界を描くためにコンピュータや脳の知識が必要であることを3章のまとめとする。以下4章では、*Bleeding Edge* の小説世界が、現代の科学技術と関係して作り上げられていることを示す。

4章 *Bleeding Edge* の主人公の環世界としての脳科学とインターネット

Pynchon の新作 *Bleeding Edge* 全体の読解と評価は困難であるが、表題の視点から、主人公の設定と描写を中心に、現代小説家が直面する情報の氾濫のなかでの創作の成果として評価する。この新作に対する書評も多様で、2013年度の全米図書賞も最終選考で逃した。受賞小説は、スレイブ・ナラティブを John Brown の蜂起とからめた McBride の作品であった。受賞作と比べれば、Pynchon の歴史背景や科学、特に映画やテレビなどのポップ・カルチャーの細部へのこだわりがはっきりする。そして、その対比は現代アメリカ文化の方向性を暗示しているように思われる。本論では現代アメリカの代表的ポストモダニズムの作家が、あえて2001年という同時多発テロの前後を時代背景とし、インターネットの深部までを視野にいれ、脳科学にも言及していること、あるいは、言及せざるを得ないことを中心に分析する。

Pynchon の特色は、カリフォルニアの主婦の日常生活から、第二次世界大戦の壮大な科学技術までを取扱い、そこに宇宙全体を支配する原理に関わる熱力学、特にエントロピーから人間性の解明に不可欠となりつつある精神科学、特にパラノイアなどを関係づけていることである。メディアからは距離を置いて、直接的な発言や行動は避けているが、彼のエッセイ集 *Slow Learner* (1984) では、Mailer の "The White Negro" を評価している。さらに、人間と世界を単純化することを自戒しつつ、なかなかできないことを告白している。*Slow Learner* というタイトル自体、精神科学の学習遅滞とも解釈できるし、Frances が危惧する医療や投薬の対象になるような表現を選んでいると解釈できる。

最新作のタイトルも、コンピュータ技術と、脳科学までを含みこむ身体性との2つの視点から解釈ができる。作品中で "bleeding edge" は、先進技術のさらに先のベンチャー的な技術を意味している (78, 437)。同時に、表現としては、生身の人間の出血している部分という解釈も可能である。実際、小説中では、コンピュータ上のバーチャルな "cyberspace" や "Deep Web" と対照的に "meatverse" という表現が多用され、生身の人間の限界と弱さを表現していることからこのタイトルの両義性は確認できる。

主人公 Maxine をコンピュータに関しては知識も関心も少ない人間としているのも、現実世界のITリテラシーの限界を表現している。Maxine は、子供たちが夢中になっているインターネット経由のコンピュータ・ゲームを知りながらも、そこに表現されるバーチャルな自分の化身としての "avatar" を、その発音からだろうか、医師が処方する薬の名前

だと思い込んでいた(69)。さらに、表計算ソフト "Excel" さえも、その発音を聞くと、Tシャツのサイズ (XL) を連想するような女性である (401)。

この小説の冒頭部分と最後の場面はともに、Maxine が二人の男の子を学校に送り出す様子をホームドラマ風に描いている。人物としての設定には、彼女が自他ともに認める "Jewish mother" として、子供に過保護な母親という、人種的ステレオタイプに近い側面も加味されている (72, 144, 441)。そうした設定のうえで、2001年春と2002年春の場面の間に、同時多発テロ事件の年に関わる科学技術が媒介する世界の恐ろしさと人間の脆さが、めくるめく複雑さで小説に組み込まれているのだ。Maxine を中心に見るならば、普通の日常生活を送っていた彼女が、インターネットなどの科学技術を介して、世界の紛争や身近な人間の殺害などに、否応なしに巻き込まれてゆく過程が描写されているのだ。

本論のもう一つの視点から見れば、脳科学との関係がフロイトにさかのぼってアメリカの問題として書き込まれている。子供たちが通う学校は、フロイトに破門された Kugelblitz という医者が設立した。彼はアメリカにわたり、金持ちの患者に精神療法をほどこす臨床医となり、その金持ちの資金援助でこの学校を設立したのだ。(2) Pynchon を理解することの難しさと、トリビアに近い謎解きのおもしろさは、ここに何気なく組み込まれている住所にも表れている。Kugelblitz の破門は小説では以下のように圧縮されている: "Freud flicking cigar ash at Kugelblitz and ordering him out of the door of Berggasse 19." (2) この住所がウィーンのプロイトの住所で、現在のフロイト博物館となっている住所であることを知らないと、状況の理解が十分でなくなってしまう。ややこしいことに、Maxine のセラピストは道元に影響されているし、そのセラピストもラカン派の精神科医にかかっている。この小説と脳科学や精神医療との関係は冒頭から明示されているのだ。

精神科学やDSMとの関係も小説の初めの部分から強調されている。Maxine は離婚した後に、気分転換のためにクルーズに行き、"AMBOPEdia Frolix" という境界性人格障害 (American Borderline Personality Disorder Association) の団体と船旅をすることになったのだ。(12) さらに、同船していたのが "Jujubes" と呼ばれる James Bond の真似をして賭け事にのめりこむ集団であり、その人たちは "General Undiagnosed James Bond Syndrome" として DSM の次の版に認定されるようロビー活動をしている。(14) 時期的に言えば、これが DSM-5 になるだろう。ADD (302) だけでなく、Romance Deficiency Disorder (180)、DITS (Discount Inventory Tag Stupor, 277) まで、まさに Frances が危惧している、確定診断が難しい症候群をカテゴリー化して、投薬や医療保険の対象に拡大しようとしている集団の動きもこの小説に組み込まれているのだ。

このとき、偶然に同船していた Reg というルポルタージュ映像作家は Lanier の危惧を表明している。インターネット上で、だれでも勝手に映像を大量にアップする状況になれば、個人が見ることができないほど多量の映像が公開される結果、どの映像も無意味にな

ると予言しているのだ: "Everybody'll be shooting everything, way too much to look at, nothing will mean shit." (143) インターネット上の情報の氾濫、タダで自由 (free) な表現が個人の意匠と努力の成果としての芸術を無意味化してしまう皮肉な結果につながるという問題も取り込まれているのだ。

ここまで見てきたように、477ページに及ぶこの小説の早い段階で、登場人物の設定により、先行研究3点で触れた、現代の人間と世界に関する作者の困難な状況が書かれているのだ。以上で本論の主要な実例をあげたこととし、以下は脳科学とインターネット以外の、これまた深刻で複雑な小説世界に触れておく。

2000年という年は、Y2K問題で世界のコンピュータ社会が震撼した年であったし、"dot.com" と呼ばれるコンピュータやソフト関連のベンチャー企業のバブルが崩壊した年でもあった。そうした混沌とした先端技術と経済をしたたかに渡り歩いているのが、Gabriel Ice という人物だ。彼は、破綻したインターネット関連会社の端株を買うなどして、影響力を行使し、アメリカの諜報機関との関係を深め、不正な会計操作を通じて富を築き、そのためには殺人も辞さない。もちろん、自ら手を下すことはなく、その証拠も証明できないような情報操作をするのである。

主人公 Maxine の両親は家庭では Maxine を過酷で過剰な情報から守って育ててきた。彼らは、世代的には冷戦からベトナム戦争、さらには、アメリカが関与した中東や南米の紛争の影響を受けて育った世代であり、自らもデモに参加している (56)。父親はインターネットが軍事目的で "conceived in sin" (420) と述べているし、ビッグデータとNCICにも危惧の念をいだいている (420)。子供への影響を心配して、そうしたアメリカの問題を直接伝えることは控えていたのだ。主人公はそうした家庭で、むしろアメリカの市民権運動に希望を持って、深入りはせずに関与してきた。そうした青春期を過ごした Maxine が、同時多発テロの年に、会計の不正監査を通じて、闇のインターネット社会と情報戦争に巻き込まれていくのだ。(411) 電話で子供たちの命が狙われていると脅迫されるが、相手も因果関係もわからない。国が関与している情報戦の "killer drone" (474) まで想定外と言い切れない世界で、子供たちの将来の安全を確保することもできないと思い知らされた母親が (412)、子供たちをエレベータまで見送る小説の最後の場面が表現している人間と世界は、一年で激変しているのだ。

ここで、この論点に即してこの小説の解釈と評価をまとめておく。第1の視点として、脳科学との関連では、DSM を含む精神医学のカテゴリーについて、また、正常と異常の境界の曖昧さが書き込まれている。Pynchon が多用するインターフェースや、中間地帯としてのゾーン (zone) に連なるテーマである。第2の視点としての、インターネットの進化とその背景としてのコンピュータ技術に関しても、この小説は、時代背景を2001年としながらも、2013年でも課題として残っているインターネットの問題点を組み込んでいる。これは、より広くは、多文化主義の理想と現実の解離にも通じる課題でもある。

脳科学やコンピュータを科学技術に関する情報の津波のなかで現代作家が創作し、読者が作品を解釈し、評価をしなければいけない作品の例として *Bleeding Edge* はアメリカ現代小説の達成として評価できる。

これまで触れてきた論点の最後の補足として、この小説が脳科学とコンピュータ以外の政治経済までも視野に入れていることを例示する。そうした濃密な小説が、最終的に古典として生き残るかどうかは、むしろ今後の読者の知識と読解の努力に依存していると考えられる。

政治経済から軍事行動やスパイ活動までを取り込んだ地名や名前のみを列挙するにとどめるが、情報戦争に関係する大国はもちろん、「テロとの戦い」(327) の中心となったアフガニスタン (31)、ニカラグア (56)、チリ (1973年介入,108)、からグアテマラ (170) までが、様々な登場人物の人生の背景として書き込まれている。そして、Pynchon の特色としてあげられる、映画やテレビなどのメディアに逃れがたく影響され、発言し、行動している人間模様が描かれている。日本からもドラゴンボール (68)、ポケモン (372) などが取り入れられている。従来の考えで、時代を超えて、世界の多数の読者に普遍的に訴え続けるという意味での古典的小説ではないだろう。

Pynchon は、*Slow Learner* での自戒で既に説明したように、小説の内容が情報過多になることも承知の上で、逃れられない現在の文化状況を踏まえて *Bleeding Edge* を発表したと考える。Mailer が批判した個人の内面や、SF的な世界に逃げることなく、現代の作者が情報に直面し、その中で、小説を構築した、現代アメリカ文学の成果として *Bleeding Edge* を評価したい。

主要参考文献

(時代背景や Late Style の参考として一部生年を () 内に表示した)

- Carr, Nicholas. *The Shallows: What the Internet Is Doing to Our Brains*. Norton, 2011.
- Chomsky, Noam (1928 -) . *Hopes and Prospects*. Penguin, 2010.
- Dawkins, Richard. *The Selfish Gene* , Oxford, 1976, ほか多数.
- Dennett, Daniel C. *Consciousness Explained*, Back Bay, 1991.
- Frances, Allen (1942 -) . *Saving Normal: An Insider's Revolt Against Out-of-Control Psychiatric Diagnosis, DSM-5, Big Pharma, and the Medication of Ordinary Life*. William Morrow, 2013.
- Kandel, Erich (1929 -) , *The Age of Insight: The Quest to Understand the Unconscious in Art, Mind, and Brain, From Vienna 1900 to the Present*. Random House, 2012.

- Lanier, Jaron (1960 -) . *You Are Not a Gadget*. Vintage, 2010.
- McBride, James. *The good Lord Bind*. Riverhead, 2013.
- Pariser, Eli. *The Filter Bubble: How the New Personalized Web is Changing What We Read and How We Think*. 2011; Penguin, 2012.
- Powers, Rrichard (1957-) . *The Echo Maker*. 2006; Vintage, 2007.
- Powers, William. *Hamlet's Blackberry: Building a Good Life in the Digital Age*. Perennial, 2010.
- Pynchon, Thomas (1937-) . *The Bleeding Edge*. Penguin, 2013.
- Pynchon Wiki: *Bleeding Edge* (Web)
- Ramachandran, V.S. *The Tell-Tale Brain: A Neuroscientist's Quest for What Make Us Human*. Norton, 2011.
- Satel, Sally and Scott O. Lilienfeld. *Brainwashed: The Seductive Appeal of Mindless Neuroscience*. Basic, 2013.
- Sen, Amartya (1933 -) *Identity and Violence: The Illusion of Destiny*. Penguin, 2007.
- Siegel, Lee. *Against the Machine: Being Human in the Age of the Electronic Mob*. Serpent's Tail, 2008.
- Spivak, Gayatri Chakravorty. *Death of a Dicipline*. Columbia UP, 2003.

An Interpretation of Pynchon's *Bleeding Edge* : Interfacing Metaspace and Meatspace

I argue that Pynchon's *Bleeding Edge* is an exemplary novel in the 21st century. After a brief review of relevant studies in literary history and contemporary advances in science, I demonstrate that Pynchon has successfully incorporated relevant information of contemporary culture.

I focus on the relation between Pynchon's depiction of fictional characters and scientific findings concerning brain science and computer technology. The world as we know it changes dramatically for the central character Maxine, an ordinary Jewish mother, as she is drawn into cyberspace and beyond, in the critical year 2001.

It is impossible to incorporate all relevant information in a fictional work of art, but Pynchon's *Bleeding Edge* is an important achievement in balancing imagination and scientific information in the form of a novel.

キーワード

現代アメリカ小説、脳科学、コンピュータ、Thomas Pynchon、*Bleeding Edge*.